

# 特集：ワイルドから見るアメリカ／アメリカから見るワイルド

## アメリカに所蔵されるワイルド関係資料 ——ワイルド没後の覇権をめぐる

宮崎かすみ

はじめに

「アメリカとワイルド」というテーマと本稿の立ち位置を最初に確認しておきたい。本稿はまず、商品としてのオスカー・ワイルドを最も高く評価した国としてアメリカにアプローチする。ワイルド自身、商品としての自己の価値を自覚し、自らのイメージを消費する大衆に向けた自己演出にこだわり抜いた芸術家の先駆であった。拡大しつつあるジャーナリズムとその読者層、舞台の観客たちといった成熟しつつある消費社会の大衆に消費される記号としてのワイルドについては、Regina Gagnierの*Idylls of the Marketplace* (1987) といった先駆的な研究でみごとに論じられている通りである。

ワイルドが商品として消費された初期の大きなイベントとして、アメリカ講演旅行が挙げられる。まだ作品すら生み出していなかった若きワイルドは、唯美主義者という商品としてアメリカ全土を講演旅行で周り、聴衆を沸かせた。この興行で手にした破格の報酬は、商品としての自らの価値を認識させるに十分であっただろう。帰国してからのワイルドは経済的にしばらく不遇を託<sup>かこ</sup>つことになることからしても、アメリカは当時からワイルドという商品を最も高く買ってくれるマーケットであった。

本稿ではアメリカの二つの大学——カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) とテキサス大学オースティン校——が所蔵するワイルドに関連する資料を扱う。これらの重要なワイルド関連資料がアメリカにあるということ、つまりアメリカ人によって買われ、現在アメリカに所蔵されている

という事実もまた、ワイルドという商品がアメリカという市場に(高値で)買われたという現象の一つの現れと捉えるからである。

アメリカに所蔵される一次資料を通して、貴重なコレクションがアメリカに渡った経緯を最初に辿りたい。さらに、著作権管理人としてワイルドの死後権力を握ったRobert Rossが、Frank Harrisと交わした書簡を分析して、ワイルドの死後、後継者の座を争ったダグラスとの確執へと至る経緯と原因を書簡資料から突き止め、ダグラスとロスというワイルドの後継者を争う立場にあった二人のイメージが分岐してゆく過程を、アメリカに所蔵される書簡資料から炙り出してみたい。

## 1. ランサム・センターとクラーク図書館

### ——ワイルド・コレクションの二大聖地

テキサス大学オースティン校に付属するハリー・ランサム・センターは人文科学系の博物館の性格をもつ文書館である。人文科学および芸術の発展を目的として、ヨーロッパ、アメリカから多数の人文科学関係の稀覯本、手稿資料のほかに写真や芸術作品などを収集し収蔵している。1970年代に図書館長となったHarry Ransomが就任してから精力的に貴重書や手稿資料の収集に努めたことが奏功し、今では19世紀以降の欧米人文科学に関するそれらの収蔵ではアメリカでも屈指の図書館となった。この図書館は、ワイルドの資料に特化した収集意図はなく、ワイルド関係の資料が抜きんでて充実しているというわけでもない。しかしJohn Addington SymondsやHavelock Ellis、Edward Carpenterといった、ワイルド周辺人物に関する書簡資料のコレクションは卓越しており、世紀転換期の同性愛・性科学関係資料の収蔵では最も充実した資料を誇る図書館の一つとなっている。とりわけ、ワイルドの絶筆となったハリス宛書簡は貴重な資料である。絶筆とはいえ、最期の愛人だったMaurice Gilbertが本文の殆どを書き、ワイルドはサインだけを認めた曰くつきのものである(図版1, 2)。

ワイルド研究者に特別な意味があるのは、UCLAに所属するウィリアム・クラーク記念図書館の方である。こちらは、William Andrew Clark Jr. (1877-1934)が個人で収集したコレクションの遺贈を受けて設立された図書館である。現在図書館となっている建物が彼の旧居宅であり、その財力、

✓  
Hotel d'Asace  
Rue des Beaux Arts  
Paris

21st Nov. 1900

Dear Frank,

I have now <sup>been</sup> in bed for nearly 10 weeks and am still extremely ill having had a relapse a fortnight ago. I must, however, for many reasons write to you at once on the question of the money you owe me. The expenses of my illness amount to close on £200 and I must beg that you pay me immediately the sum <sup>of</sup> which you are still indebted to me. On September 28<sup>th</sup>, nearly two months ago, you drew up an agreement in your own handwriting promising to pay me within a week from that date the sum

図版 1

of the sum the doctors don't to order me seemed to have any effect. Today is <sup>the</sup> Tuesday the 20<sup>th</sup>, I rely on receiving from you £150 you owe me

I am  
yours  
W. J. G.

図版 2

アメリカに所蔵されるワイルド関係資料

41, CARLYLE SQUARE,  
CHELSEA,  
S.W.3.  
\*\*\*\*\*  
August 18th, 1923.

My dear Mr. Clark,

Knowing the very great interest that you take in the works of my father, the late Oscar Wilde, I am wondering whether you would care to acquire the letters and manuscripts in his handwriting which are now in my possession. The items in question were bequeathed to me by the late Mr. Robert Ross five years ago, and since then persons interested in my father's life and work have come from all over the world to see them, and it is only after much thought that I have decided that I am willing to part with them. They are as follows:-

A. Letters to Robert Ross from the quarrel with Queensberry until Oscar Wilde's release from Reading.

1. Letter from O.W. to R.R. on receipt of Queensberry's visiting card 28/2/95, on Albemarle Club notepaper.
2. ) Letters from O.W. to R.R. { 10/3/96.
3. ) From Reading Gaol, on { March/96.
4. ) blue prison paper, similar { May/96.
5. ) to that used for the US of { 1/4/97.
6. ) De Profundis, now in the { 6/4/97.
7. ) British Museum. { 12/3/97.
8. ) { May/97.

These letters, with the exception of Nos. 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, are bound in a half blue levant morocco binding by Zaehnsdorf, each letter being carefully mounted and guarded. Bound up with the letters are the notes on each letter in Robert Ross' handwriting which he prepared for his litigation with Lord Alfred Douglas.

In addition, there are various items of great interest bound in, including letters from the

図版3

41, CARLYLE SQUARE,  
CHELSEA,  
S.W.3.  
\*\*\*\*\*  
(4)

F. A quantity of miscellaneous fragments, drafts and corrected typewritten drafts of plays.

\* \* \* \* \*

The price I am asking for the complete collection is £12,000 (twelve thousand pounds sterling). I consider this to be a very reasonable figure in view of the unique historical interest of the letters alone.

Should this offer interest you, I shall be most happy to forward the collection to you on receipt of your written or cabled instructions.

With best wishes,  
I am,  
Yours sincerely,  
*Vivyan B. Holland.*  
(Vivyan B. Holland)

Mr. Williams Andrews Clark, Jr.  
2205 West Adams Street,  
Los Angeles, California.

図版4

収集意図、そしてワイルドに関する資料への特殊な関心からして、クラーク個人の財力と意図に拠るところの大きい特色ある図書館と言える。

というのも、クラーク自身が男性との親密な交際をしていたと伝えられる人物であり、ワイルドの同性愛にも尋常ならざる関心をもっていた。ハリスの書簡中に、クラークがダグラスの手紙を出版したといった記述を認めることができ、クラークの秘書のロンドンでの消息が伝えられている<sup>1</sup>。そこから、彼は同性愛者としてのワイルドに格別の関心をもって書簡資料の取得・所蔵を目指し、アプローチしていたことが窺える。

クラーク図書館が誇るワイルド・コレクションの枢要な部分が購入されたのは、1929年、ロンドンのオークションであったとされる<sup>2</sup>。このコレクションは「市場に出回る可能性のあるものとしては最大にして最後のワイルド関連資料であろう」<sup>3</sup>と当時の伝記作者が評している。ワイルドがロスに宛てた手紙を多く含むこのコレクションは、ロスが保管していたものが、その死後、ロスの秘書だったChristopher Millardの手に渡り、1927年のミラードの死後、ワイルドの次男、Vyvyan Hollandが所有していたものである。

ロス・コレクションと呼ばれるこの資料の売却は、しかしながらいかなりオークションにかけられたのではなかったらしい。前年の1928年の夏に、ヴィヴィアンがクラークに売却の打診をした手紙が当館に残されている(図版3, 4)。この手紙のなかで12,000ポンドという金額が提示されているにもかかわらず、最終的にオークションにかけられた理由や経緯は不明である。ワイルド関連資料の所在をまとめたハイドは、このオークション時点でクラークは既にかかなりのワイルド資料を収集していたと書いているが、確かに1926年11月にヴィヴィアンはクラークに宛てた手紙のなかで、提示した資料の価格に再交渉の余地があると書いている。だが、その時点での提示金額は不明であり、1928年の正式な価格提示となったようだ。

## 2. ロバート・ロスとフランク・ハリスの往復書簡から

### ——ロスの権威の確立

これまでクラーク図書館の収蔵資料から興味深いものを紹介してきたが、次に本稿では、二つの図書館が所蔵するロバート・ロスとフランク・ハリ

スの間でやりとりされた書簡の分析を通して、ダグラスとロスについてそれぞれ対照的なイメージができあがった経緯の一端を明らかにしてゆきたい。

ワイルドの死後、ダグラスには無情で酷薄な人間というイメージが定着したが、対照的に、ロスは生涯、ワイルドへの献身的な友情を貫いた模範的な友人というイメージが浸透した。例えば、ワイルドの妻の生涯を描いた *Amor* はダグラスのことを「金髪の魔物」と呼ぶが<sup>4</sup>、不幸な境遇のワイルドを支えた模範的な友人と思われたロスは、「友の中の友」と広く称されていた。実際に二人はワイルドの死後、裁判で争い合う宿敵となったのだが、こうした係争関係と並行して、ダグラスの悪しきイメージが作り上げられ世間に広まっていった。しかし近年、ダグラスが母に宛てて書いた、ワイルドを擁護する手紙などを根拠に、二人についてのこうした評価が一方的なものであるとして、修正や見直しが提起されている<sup>5</sup>。本稿ではこの問題について、ハリスとロスとの間の往復書簡に基づき、ダグラスの悪しきイメージが作り出された経緯を詳しく辿り、その原因を探りたい。

クラーク図書館のワイルド・コレクションのなかでもロスとハリスのやり取りは、タイプ原稿も含み、読みやすい形で残る、ワイルド周辺の人間関係を探るには有益かつ貴重な資料である。特に頻繁なやり取りが残っているのは、1916年にハリスがアメリカでワイルドの評伝、*Oscar Wilde: His Life and Confessions* を出版する前後である。

この書物をハリスが準備する時期にロスと頻繁な文通があったという事実自体、ダグラスのイメージ形成にロスがかかわっていたことを推測するのに十分である。ハリスのこの評伝には、ワイルドがロスに宛てた書簡が多数引用されている。ハリスはロスからワイルド書簡を見せてもらったうえで利用して、この評伝を執筆した。ワイルドをナポリで見捨てた冷酷なダグラスというイメージを作るのに大きく寄与した手紙も、ロスに宛てられたのをハリスがそのまま本書で引用したものである。特にこの最後の箇所はダグラスを激怒させ、後述するランサム裁判での争点の一つとなった<sup>6</sup>。

ボウジーが四か月もの間、絶え間なく手紙をよこしてぼくに「家族」を与えると申し出た。(中略)彼の申し出を受け入れて、ナポリの途上、

エクスで合流してみると、彼には金もなければ計画もなし、そして約束もすっかり忘れていたことが判明した。彼の頭にあるのはただ、二人の生活費は全部ぼくが工面すべきというものだったので、ぼくは120ポンドを掻き集めた。(中略)彼も自分の分を負担しなくてはならなくなったら、手に負えなくなった。意地悪でケチくさくなり、自分の快樂に関わること以外の金を出し渋るようになった。そしてぼくの手当てが打ち切られると彼は去っていった。(中略)辛い人生において、もっとも心折れた出来事だった<sup>7</sup>。

この一節は、のちにリチャード・エルマンが決定版のワイルド伝中で引用したことによって一般に広まったと言えよう<sup>8</sup>。こうしてダグラスは、ワイルドを失脚させて牢獄に送り、出獄した後も利用するだけ利用した挙句、金が尽きたら冷酷に見捨てたと男であるという印象を世間に広められ刻印された。

この別離の後に、ダグラスが母に宛て、今でもワイルドを尊敬していると書いた手紙があるし、ダグラスは出発時に、しばらくは暮らしてゆける十分な金銭をワイルドに預けたと主張し、銀行口座を証拠としてあげていた<sup>9</sup>。今ではワイルドのこの記述の方が虚偽と見られている。事実、その後も二人の関係は継続しており、手紙の内容とは矛盾する経緯が多数あったからである。

この手紙の執筆時、ワイルドをめぐるダグラスとロスの三角関係はすでに成立していた。出獄してダグラス宛ての長い書簡を書いた直後の、彼に対する怨恨で心がはち切れんばかりだったワイルドにとって、ロスの献身や優しさは大きな慰めであった。その文脈でワイルドがダグラスを悪者にして痛罵することで、ロスの機嫌を取っていたという側面は否めなかったろう。ロスもワイルドを独り占めできるこの関係に当初は満足していたらしいが、数か月後に結局ワイルドは、あれほど悪しざまに言っていたダグラスとの再会を果たした。そのことをワイルドがロスに即座には伝えていなかったことからしても、ロスに対する罪悪感があったのにちがいない。そうした事情を考慮すれば、ワイルドがロスに語ったダグラスの悪言自体、ロスの機嫌をとるために脚色が施されていたと想定するのは自然である。



ところがハリスは、それを考慮するでもなくワイルドの言葉だけを一方的に提示した。

しかし、ここにはそれ以前の問題がある。ロスに宛てたワイルドの手紙をハリスが評伝に引用していることである。本来それはロス本人に宛てた私信であり、ロスの所有物である。それをハリスが自分のワイルド伝に利用したということは、ロスがハリスに使用許可を与えなければ不可能である。この点を明らかにするのが、ハリスがその許可を求める書簡(1913.12.18付)である。ハリスは以下の文言を今後刊行予定のワイルド評伝の序文に掲載してもよいか、ロスに許諾を求めている。

Years ago, Mr. Robert Ross, Oscar Wilde's literary executor, gave Mr. Frank Harris full permission to use all Oscar Wilde's letters.<sup>10</sup>

これに対する返信(12.19付)で、ロスはダグラスの自分への嫌がらせが高じていることから、自分の名前は不用意に出してほしくないと答えている。それでも「序文にぼくの名前を言及する必要があるなら、以下のようなものなら使ってもよい」と記し、以下の文言を記した。

That when Wilde died in 1900 you, who were aware that Wilde had expressed a wish that I should act as his literary executor, asked me whether there would be any objection to your publishing letters from Wilde in your possession, if at any time you should be contemplating writing a life of Wilde; that in 1906 when I was appointed by the Court the executor and administrator of Wilde's literary and dramatic estate, you obtained from me the necessary permission to reproduce the letters from Wilde in your possession.<sup>11</sup>

ここでロスが許可を与えているのは、ハリスが所有する書簡に対してである。ところが、実際にハリスは評伝中でロスに宛てた手紙を多数掲載している。ロスの文言では、彼は自分が裁判所から任命された正式のワイルドの著作権管理者であることを強調している。ロスのワイルドの書簡を含



む著作全般に対する権力は、まさにここに依拠していることを確認しておきたい。

結局ハリスが掲載したのは以下の文言だった。“Years ago, Mr. Robert Ross, Oscar Wilde’s literary executor, gave Mr. Frank Harris full permission to use all Oscar Wilde’s Letters.”<sup>12</sup>最初にハリスが打診してきたのと同じ文章である。ロスが許可したのは、ハリスの所有になるワイルド書簡であったはずだが、いつのまにか「すべてのワイルドの手紙」になっている。ハリスがこれを知らせたのは出版後だから、この措置にロスから抗議があったとは考えにくい。いずれにしろ、ハリスはこうしてワイルド書簡を自由に使用する許諾を——いくらか強引と思える手段で——得て、ロスとダグラスの対立関係への配慮が一切ないまま、ワイルドがロスに宛てた手紙がふんだんに掲載された評伝を世に出した。しかも、手紙がその時々の一時的な感情に突き動かされて書かれることはよくある。そのような一時の感情から書いたダグラスへの痛罵が、書籍に引用されることで永遠に固定された、というのは、客観的に見て、ダグラスにとって悲運であったと言わねばなるまい。

クラーク図書館に所蔵される書簡を見る限りでは、二人の文通はハリスがワイルド伝を刊行した直後の1916年10月に再開されたようだ。10月24日付のハリスの手紙には、ロスの秘書のミラードから、いくつかの点でダグラス側に寄った見解があるとの指摘を受けたとある。「ぼくはダグラスの見解を採用するほど彼のことが好きだったことなどこれまでない」<sup>13</sup>から、ミラードの誤解だとハリスは書いている。また、ダグラスが、ワイルドとロスと自分を激しく糾弾する *The Myth of Oscar Wilde* というタイトルの本を準備しているらしいとも言う。ここからも、ハリスはダグラスに明らかに敵対的であり、ロス側の立場に拠って執筆していたことがわかる。また、ダグラスに与<sup>くみ</sup>した見解に影響されていないかどうかを、このようにロスが検閲のようにチェックしていたことも窺える。評伝執筆に要求される公平さは望むべくもない状況であった。

11月10日付の手紙からわかるのは以下のことである。アメリカでのみ刊行されたこの書籍も、イギリス在住でも希望者には直接送付されたい。ところが何らかのトラブルで、前金を払ったにもかかわらず本が届い

ていない者が数人いたらしく、ハリスは彼らの名前を教えてくださいと依頼している。ここから、イギリス在住者にも評伝の内容はある程度伝わっていたことがわかる。また豪華本には日本の和紙 (Japanese vellum) を使うと述べている。

ハリスはこの書簡の最後でワイルドの次男、ヴィヴィアンの消息を尋ねる。「ところで、オスカーの子息のヴィヴィアン・ワイルドが亡くなっているか否かを教えてください。亡くなったという人もいれば存命だという人もいる。教えてもらえると有難い。シリルは戦争で亡くなったという話だし、これはぼくも確かなことだと思う」<sup>14</sup>。

この後もハリスはロスに多数の書簡を送っているが、ロスからの返信は翌年の2月までなかった。ハリスにしてみれば、自分が何通手紙を送ってもロスが一切返事をよこさない状況は、ロスの機嫌を損ねたのではないかと気が気でなかったようだ。特に彼は、近く刊行する予定の廉価版のワイルド伝のために、事実関係の校閲をロスに依頼していた。その返事をイライラして待っていたハリスによく返信が届いたのは、年が明けた17年の1月になってからで、それも秘書のミラードからだ。「彼 (=ミラード、挿入引用者) が君 (=ロス、挿入引用者) に正誤表を送ったと伝えてくれた。どうかお願いだからそれをすぐにぼくに送ってくれたまえ」<sup>15</sup>。ハリスの最初のワイルド伝 (初版) の校正に関しては、「ロスが手稿段階で、ダグラスについてのハリスの見解を徹底的に修正させた」<sup>16</sup>とされるが、廉価版に関しては、ロスがハリスに影響を与えるような修正をさせたというやりとりは見受けられない。2月になってようやくロス本人から来た長い手紙には、校正に関して以下の文言がある。「正誤表については複写させて、今週君に転送させる。君が送ってくれた本に書き込んだのだが、ぼくは校正の管理をするためにエディンバラまで行ったよ。ぼくは事実関係しか直せない。印刷屋の間違ひは見えていないが、そう多くはないようだ」<sup>17</sup>。こうした表現からすると、廉価本の校正段階に至って、ロスがハリスの見解を大きく変えさせたというようなことがあったとは考えにくい。

この長い手紙では、この間のハリスからの書信は認識していたものの返事をしていなかった、と書かれているが、その理由は明記していない。こ

のことからもロスの精神状態がかなり不安定であったか、あるいは何らかの作業に没頭していたことが推測される。2月1日付手紙には興味深い内容が多く含まれるので、少し丁寧に紹介したい。

ダグラスは、ワイルドの書き物に対するロスの「超然として横柄な態度」を批判していた、という。ロスとしては一種の技として、自己の見解の表明を抑制していたのだと告白する。「自分が世に出すのに尽力したわずかなワイルドの作品や人生のなかに、ダグラスとクロスランドが是認の言葉を必死に探しても叶わなかったことは、自分にとっては何よりも満足な報いであった」。さらにロスは、ワイルド作品を世に出す人間として透明な存在であろうと努めてきたという心情を吐露し、それは成功したと自負している。ワイルドの姿を後世に伝えるのに、自分の恣意的な解釈によって歪めたりはしていない、と弁明しているようにも読める。

1900年の時点で私が引き受けた役割は、書物や戯曲が公正に読まれ、語られるようにすることであった。そしてワイルドの遺児たちのためにそこからいくらかの印税を得られるよう努めた。友人たち、ことに君はぼくのこの尽力が実っていることをとても寛大に認めてくれている。だがぼくは実のところ、自分のこの役割がもう終わったと思うのだ。もしぼくがいささか天狗になりすぎているとしたら、それは君たち友人のせいだよ。君たちはぼくに過分なまでの称賛を寄せてくれたからね。(中略)

ダグラスが1900年初頭にクィーンズベリー侯爵から25,000ポンドを相続したときまだワイルドは存命だったので、ぼくはワイルドの借金を返済したうえで版權を買い取るよう彼に依頼した。版權については借金が完済されるまでぼくが管理してもよいとも伝えた。ところが彼はそれどころか、シャンティイに馬の飼育場を買って半年もたたないうちにその金を消尽してしまったんだ。(中略)

しかしダグラスは、あんなにすばらしいビジネスの申し出を断ってしまったために、自分自身もぼくのこと、決して許せないでいる。何年か経って、ぼくがワイルドの著作権を破産から救いだしたことで信望を得ると、それをあからさまに妬むようになった。さらに、もし

ぼくの申し出を受けていたら自分のものになっていたであろう相当に巨額な利益がうらやましくてたまらなくなったのだ。これが、ぼくらの決定的な反目の真相である。従弟の George Wyndham からの資金援助を受けると、彼は一連の行動を始めた。下劣な復讐心からぼくを破滅させたいというにとどまらない。今や彼の誠実さに関する評価は風前の灯であれど——唯一かろうじて彼に残されたものであるが——、これを何とかして取り戻したいという動機もあってのことだ。(中略)

ワイルドの本の売り上げについて、君は聞いていたのだったね。一冊1シリングということを考慮すれば、売り上げはかなりいいものの、もちろん印税はそれほど多くはない。(中略) 文芸、戯曲ともにもっとも金銭的な価値のある著作のいくつかはぼくが管理人になる以前に破産管財人に、あるいはワイルドが破産する前にはワイルド本人によって売却されていた。その中には“Dorian Gray”や“Earnest”, “Windermere”が含まれている。著作権管理団体が今所有しているのは半分に少し満たないくらいで、最も金になるのは *De Profundis* だ。

(ロスが管理人になった、挿入引用者) 1905年から、シリルが亡くなった1915年までで一番よかったのは1913年だった。税引き後でも、子息のそれぞれが970ポンドを受け取った。シリルは遺言で、今ヴィヴィアンとぼくとで共有している利益のうち、彼の分け前をぼくに残してくれた。昨年、ヴィヴィアンとぼくとでそれぞれ400ポンドを得た。

手紙はさらに続くが省略して、末尾に付された追記を訳出する。

#### 追記

Cyril Holland がインドを発つ前、そこから彼は直接フランスに行って亡くなったわけだが、彼は弁護士に手紙を書き、それを弁護士はぼくに転送してくれたのだが、その手紙を同封する。気に入れば、これを出版してもいいよ。言うまでもないが、むろんぼくは彼の破格の申し出は断ったよ。だがこの手紙を読むと、彼がどんな気骨の持ち主であったかがよくわかる。これは、ぼくがトラブルに巻き込まれていた

さなかに書かれたものだ。君の本の趣旨に合うのかどうか分からないが、掲載については君の判断に任せる。

さてここで、ロスが言及する、シ ril が弁護士の Hargrove に書いたという手紙の内容を確認したい。弁護士がロスに送ったものを、ロスはハリスに宛てた手紙に同封した。以下がその遺書である。

Dear Hargrove,

I have just heard of the Ross v. Crossland case. Please write to Mr. Robert Ross

1. To say that I desire —not to say insist—on all trial expenses to be defrayed by estate, if possible. If estate will not run to this, that I wish to pay expenses out of personal income.
2. That the estate is at the personal disposal of Mr. R. Ross, capital, copyrights, interest, everything, to do with what he should think best to prevent the recurrence of any such future annoyance by Lord A.D. I am willing to make out a deed of gift should Lord A.D. consent to accept any such offer, a proviso to be made to obviate the possibility of Lord A.D. writing defamatory or obnoxious “introduction” against Ross or my father.
3. You will inform Mr Ross that this is no Quixotic offer. It is profoundly serious. I regard the quarrel as mines as much as his. My honour is more to me than money.
4. That my brother shall be compensated out of my private income.<sup>18</sup>

以上が、便箋1枚に書かれたシ ril の、ロスへの配慮を弁護士に指示した内容である。彼は、この約3か月後、1915年5月9日にフランスでスナイパーに狙撃されて亡くなった。シ ril がロスに宛てたわけではないこの書簡が、ハーグロウヴの一存でロスに送られたと推測される。自慢したくなるのもむべなるかな、ロスに対するシ ril の全幅の信頼を示して余りあ

る。また、ダグラスが刊行の準備をしているという書物の序文で、ロスや父親に対して誹謗中傷の言葉を吐いて、またスキャンダルになるのではないかと心底危惧していることもわかる。これは、ワイルドの長男としてシリルが、彼ら一家を不幸のどん底に陥れ一家が離散する原因をつくったダグラスに、いかに深く傷つけられたかを知りうる悲痛かつ貴重な資料である。しかも、遺書まで準備していた彼が、三か月後に亡くなったことを思うと一層痛ましい。シリルは父と生き別れた後、父について聞くことも語ることも許されない環境で、父の世界から隔絶されて生きてきた。親権者の Adrian Hope が亡くなってから、ロスは遺児たちと積極的に交流するようになった。ロスによって初めて父の世界に導かれた遺児たちは、ロスを亡き父の代わりのように慕い、反面ダグラスを天敵のように見なしていたようだ。

シリルが表明している、ロスへの信頼と敬愛の念をロスが誇りにしていたのは間違いない。さらに言えば、ワイルドの著作権管理人として権力をほしいまま恣にし、ワイルドの友人としてダグラスを霞ませてしまうほどの権勢を誇っていたのは、遺児たちから勝ち得た信頼を拠り所としていたというのも想像に難くない。先に紹介した手紙でも、ロスは著作権を遺児たちのために確保した経緯を細かく書き、それによる印税の額までも詳述していた。そこにも、自分の手柄を誇りたいロスの得意——虚栄心とまでは言えないまでも——が垣間見えるのは否めない。しかも、ワイルドの著作権を買い取る提案をしていたことまでも明らかにしている。それを断ったダグラスが、今になって著作権をロスが管理することに嫉妬しているのが、ダグラスとの確執の真相であるとロスは説明する。確かに二人の諍いの原因として、ワイルドの著作権の管理は大きな要素であったのは間違いない。ロスの最も大きな貢献としてたたえられていたのは、ワイルドの著作権を買い戻したことであった。

しかしながら、二人の争いの原因はロスが言うほど単純ではない。まずは、ワイルドがダグラスに宛てた長大な獄中書簡を、ロスが法廷で証拠として提出するというような情け容赦ない切り札を出したがために、ダグラスに再起不能になるほどの打撃を与えたこと、その遺恨によってダグラスがロスに対する復讐鬼と化してしまったこと。さらに突き詰めると、ロス

がワイルドの書簡使用の裁可の権限を独り占めたことに行き着くように思われる。シ ril が手紙のなかで大変心配している「裁判」とは、ロスがダグラスを名誉棄損で訴えた裁判のことであるが、次に、この事件の経緯を概観したのち、事の真相を考えてみたい。

### 3. 阻止されたダグラスの弁明——*Oscar Wilde and Myself*をめぐる

ロスとダグラスの係争の端緒は、1912年3月に刊行された、Arthur Ransome 著、*Oscar Wilde: Critical Study*と題された一冊の本だった。ダグラスの名に言及こそしていないが、事情を知る者にはすぐわかる書き方でダグラスをワイルドの失脚の原因としていた。これを読んだダグラスは激怒し、ランサムと出版社および販売したタイムズ・ブック・クラブを名誉棄損で訴えた。

13年5月に行われた裁判の争点は、1)ダグラスがワイルド失脚の原因を作った、2)ダグラスが出獄後のワイルドの再起を妨げた、3)ナポリでもワイルドを見捨てたという三点がダグラスへの名誉棄損に当たるか否かであった。ロスの支援を受けたランサム側は、内容が事実に基づいていることの証拠として大英図書館に寄贈され1960年まで封印されるはずだった、ワイルドがダグラスに宛てたあの長い手紙の原本を提出した。これが法廷に持ち出され、満員の傍聴席とそしてダグラス本人の目の前で読み上げられたのである。事前に送られたこの書簡を全て読んでいたとはいえ、ダグラスにとってこれは地獄だったに違いない。あたかもワイルドが墓の中から呪詛の言葉を吐きかけているかのようであった。

ランサムの本の内容は名誉棄損的ではあれども真実であるとされ、ダグラスは敗訴した。ランサム裁判での敗北と、ワイルドからの厳しい難詰を読み上げられるという前代未聞の屈辱に、ダグラスは打ちのめされた。さらにこの裁判に負けたことで破産したうえ、直後に妻の Olive が家を出てしまった。この別居劇はダグラスと折り合いの悪い義父 Colonel Custance の采配であったが、その後、息子の Raymond までもが義父に奪われ、ダグラスはそれまで築いてきた家庭を失った<sup>19</sup>。

法廷ではなんの反駁も反論もできなかったワイルドの非難に、ダグラスはしばらくすると自分なりに弁明と釈明をしたいと思うようになった。そ



ここに本の執筆を依頼する出版社が現れた。*Oscar Wilde and Myself* (1914) という書物は、表向きダグラスの著作とされているが、実際は *The Academy* 誌の同僚編集者でダグラスの片腕 T. W. H. Crosland が、ダグラスとのやり取りを参考に書き上げたものである。ダグラスは自分に宛てた獄中書簡の不本意な公表により深手を負い、またワイルドに裏切られたという煩悶に苛まれていたため、この本を、ワイルドへの遺恨を晴らす機会にするつもりだった。しかもワイルドを嫌っていたクロスランドがその調子を一層強め、ワイルドをあることないことで貶め痛罵する読むに堪えない内容であった。ダグラスは後に、あのような本は出版されるべきではなかった、と弁明しなくてはならない程だった。

それはともかく、その本で、裁判時には叶わなかった釈明をし、自分の主張を公表したいというダグラスの希望は切実だった。自分がワイルドを見棄てたのではないことを証明する手紙を掲載し、さらには、自分宛の獄中書簡の本文も載せて、注を付けて逐一反論・釈明をしたいと考えていた。ところが、それを察知したロス は、著作権管理人の権限を行使して、その本の出版差し止め命令を発した。このため、この本の刊行は大幅に遅れ、ランサム裁判直後の世間の関心が冷めやらぬうちに出版できれば500ポンドの報酬を支払うという出版社との契約も反故になった。著作管理人としてのロスの権限はイギリスでしか通用しなかったため、彼は、ダグラスがアメリカで *De Profundis* を含む本を出版することを阻止するために、1913年9月にダグラスへの告発部分も含む完全版のダグラス宛獄中書簡を急遽15部刊行し、1部は議会図書館に納めたのと同時に書店にも並べ、アメリカでの著作権法が適用されるよう既成事実を作った<sup>20</sup>。

ワイルドを破滅させた上に金がなくなったらナポリで見棄てた、というワイルドがロスに宛てた手紙の一節だけは、ダグラスには許せなかった。その他にも自分に不本意な内容を修正し弁明する機会となるべき本を出版しようとしたダグラスを、ロスはかくも入念かつ徹底的に妨害した。他方、先に見たように、ハリスにはワイルドの手紙を自由に利用する許可を与えていた。ハリスは、ロスに宛てたものも含めたすべてのワイルドの書簡を自由に使ってワイルド伝を書くことができた。しかるにダグラスは、自分に宛てられたワイルドの手紙さえ使うことを禁じられた。著作権管理人の

権力を盾にしたロス、ハリスを使って自分に都合のよいワイルド像や生涯のドラマを作りあげることができた一方で、ダグラス側からの反論や、ダグラスから見たワイルドの人となりや公になることを封殺した。大幅に遅れはしたもののついに刊行された *Oscar Wilde and Myself* で、ダグラスの、ワイルドが自分に宛てた獄中書簡から引用した箇所の一文一文に反論し説明しようという目論見は叶わなかった。「引用のできない攻撃文に返答するのは大変困難である」<sup>21</sup> からだ。

ロスの、ワイルドの著作物すべてを我が物にするかのような態度に、ダグラスの憤りが収まらなかったとしても何ら不思議はない。そもそも件の獄中書簡の大部分は、ワイルドがダグラスに宛てた手紙なのだから、ダグラスの所有物であるはずなのである。ダグラスは大英図書館にそう主張して手紙を自分の元に返却するよう要求したが、その手続きには裁判を起こさねばならないと返答され、経済力のないダグラスは断念せざるをえなかった<sup>22</sup>。

ランサム裁判後の二人の関係がかくまで悪化したことの淵源に遡れば、ワイルドの著作物、とりわけダグラス宛獄中書簡に対してロスが行使する専横的な態度にたどり着く。自分に宛てられた手紙さえ引用することを妨害されたダグラスは、復讐の鬼と化し、ロスを破滅させることに執念を燃やし続けた。そのためにダグラスはかつて自分の父親がワイルドにしたのと同じことをした。つまり、ロスに嫌がらせを続けて名誉棄損で訴えさせ、法廷でロスが男色家であることを証明したのである。証拠を集めるために、ダグラスは探偵を雇ってロスをつけ狙い、私生活にまで探りを入れた。ダグラスの思惑通り、度重なる嫌がらせを受け続けたロスはダグラスを名誉棄損で訴えたが、ダグラスはロスが男色家である証拠を提出すると、ロスが訴えを撤回し、その結果ダグラスが裁判に勝訴した。

この間、そしてそののちも常に探偵に尾行され、私生活を見張られていたロスは、強迫神経症のような状態に陥り、激しいストレスのために持病の喘息が急速に悪化していった。1918年に急逝したロスの晩年は、四六時中誰かに見張られているのではないかという強迫観念によって一時も心安らぐことがなかったせいか、年齢に比して異常に老化が早く進んで病み衰えていったという<sup>23</sup>。ワイルドの友人たちのなかで、ロスが最も早く世

を去った。彼の早世に、ワイルドがダグラスに宛てて書いた特別に長いあの手紙をめぐる不幸な静いが小さからぬ影響をおよぼしたことは否めないだろう。

終わりに

本稿では、「アメリカとワイルド」というテーマから、アメリカに所蔵されるワイルド関連の資料を紹介しつつ、ロスとハリスの往復書簡にアプローチして、ロスとダグラスの対照的なイメージ形成の経緯を資料から辿ってみた。一次資料を使いこなすことは容易ではないが、評伝執筆前後のハリスとのやりとりに焦点を当てることで、ロスが行使した特別な権限とそこに至る入念な工作をあぶり出すことを試みた。巷間に広まる「誠実な友人」の鑑のような人物、という評価だけからでは窺い知れない一面である。

他方、悪者にされてきたダグラスだが、これも、友人たちの証言や手紙などから判断するに、ロスのような狡猾さや奸計は持ち合わせず、激しやすく狂暴ではあるものの単純で無防備な人物像が浮かび上がる。ハリスの評伝が出ると、当然ながらダグラスは怒り狂い、激しくやりあった。しかしロスの死後、ハリスはReginald Turnerにも事実関係の確認をするなどして、ロスが提供した情報に偏りがあり、ロスに騙されていた部分もあったと自覚するようになる。ハリスはダグラスと和解して関係も復活し、ついに1925年のワイルド伝の改訂版では、例の獄中書簡についてかつて叶わなかった弁明と反論を、序論の形でダグラスに書かせ、掲載した。ダグラスはそこでようやく、ワイルドが自分について嘘を書いたのだと——いささか下品な形ではあるが——告発することができたし、誠実な人柄として知られるロスが自分に仕向けた悪辣さや狡猾さを思う存分糾弾して溜飲を下げた。

ハリスは、ダグラスの文章を受けて、彼の人間性に対する自分の判断は間違っていたと率直に認めている。とはいえ、彼の書いたことをすべて受け容れたわけでもなかった。ダグラスが書くワイルドとの関係について、もう一方の当事者ワイルドの言い分を聞かない以上は判断を保留にする、としている<sup>24</sup>。ハリスなりに評伝には公平さが追求されねばならないことを痛感したにちがいない。

\*本稿は、日本ワイルド協会第46回大会シンポジウム「ワイルドから見るアメリカ／アメリカから見るワイルド」(2021年12月11日)において発表した内容に基づき加筆・修正したものである。

注

Clark Libraryと記している資料は以下の所蔵である。

William Andrews Clark Memorial Library, University of California, Los Angeles

Harry Ransom Centerと記している資料は以下の所蔵である。

Harry Ransom Humanities Research Centre, University of Texas at Austin

なお、本文中での書簡の引用は、文脈上原文が必要であると判断される引用に限って英語原文を掲載し、その他の引用はすべて筆者による試訳である。

- 1 Frank Harris to Vyvyan Holland, 23 November 1926. (Clark Library)
- 2 H. Montgomery Hyde, *Oscar Wilde* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1975), p.441.
- 3 Seymour de Ricci, quoted in *op.cit.*, p.441.
- 4 アン・クラーク・アモール『オスカー・ワイルドの妻—コンスタンス・メアリー・ワイルドの生涯』(角田信恵訳、彩流社、2000年)。原著は、Anne Clark Amor, *Mrs. Oscar Wilde A Woman of Some Importance* (London: Sidgwick & Jackson, 1983)。引用は上記翻訳による。
- 5 たとえば Douglas Murray, *Bosie the Man, the Poet and the Lover of Oscar Wilde* (New York: Miramax, 2002) や Matthew Sturgis, *Oscar A Life* (London: Apollo, 2018) など。
- 6 ロスは Arthur Ransome がワイルドの評伝 *Oscar Wilde A Critical Study* (1912) を執筆する際にもこの手紙を含む資料を提供し、本文の中で部分引用されている。
- 7 Frank Harris, *Oscar Wilde His Life and Confessions* (New York: Garden City Publishing, 1930[1916]), p. 282. ハリスはこの手紙を1897年12月のものと記しているが、実際は翌年3月に書かれたものである。

ちなみに、ロバート・シェラードも1906年にワイルドの評伝を刊行しているが、Laura Leeはその書物に関しては、ナポリでの別離の記述がダグラスがかなりの金額を置いていったことなど、ダグラス側の主張に即したものになっているためにダグラスは異議を唱えなかった、と記している。しかし筆者が所有する1906年のレプリカではLeeの言うような記述はなく、ダグラスと思わせる人物がワイルドを裏切ったと解釈できる詩が掲載されている。以下を参照。Robert H. Sherard, *The Life of Oscar Wilde* (London: T. Werner Laurie, 1906), p. 415. Laura Lee, *Oscar's Ghost The Battle for Oscar Wilde's Legacy* (Stroud: Amberly, 2017), p. 242.
- 8 Richard Ellmann, *Oscar Wilde*, (Harmondsworth: Penguin, 1987), p. 522.

- 9 Lord Alfred Douglas to Lady Queensbury, 7 December 1897. Quoted in Alfred Douglas, *Without Apology* (London: Martin Secker, 1938), pp. 302-5. 銀行口座については以下を参照。Lord Alfred Douglas, 'The full and final confession by Lord Alfred Douglas', in Harris, *op. cit.*, p. xxiii.
- 10 Harris to Ross, 18 December 1913. (Clark Library)
- 11 Ross to Harris, 19 December 1913. (Clark Library)
- 12 Harris to Ross, 21 December 1913. (Clark Library)
- 13 Harris to Ross, 24 October 1916. (Clark Library)
- 14 Harris to Ross, 10 November 1916. (Clark Library)
- 15 Harris to Ross, 9 January 1917. (Clark Library)
- 16 Quoted in Lee, p. 229.
- 17 Ross to Harris, 1 February 1917. (Clark Library)
- 18 Cyril Holland to Hargrove, 1 July 1914. (Harry Ransom Center)
- 19 Murray, *op. cit.*, p. 188.
- 20 *Ibid.*, p. 192.
- 21 *Ibid.*, p. 203.
- 22 平井博『オスカー・ワイルドの生涯』(松柏社、1960年)、259ページ。
- 23 Jonathan Fryer, *Robbie Ross Oscar Wilde's Devoted Friend* (New York: Carroll & Graff Publishers, 2000), p. 244.
- 24 Lord Alfred Douglas, 'The full and final confession by Lord Alfred Douglas', in Harris, *op. cit.*, p. xxxix.